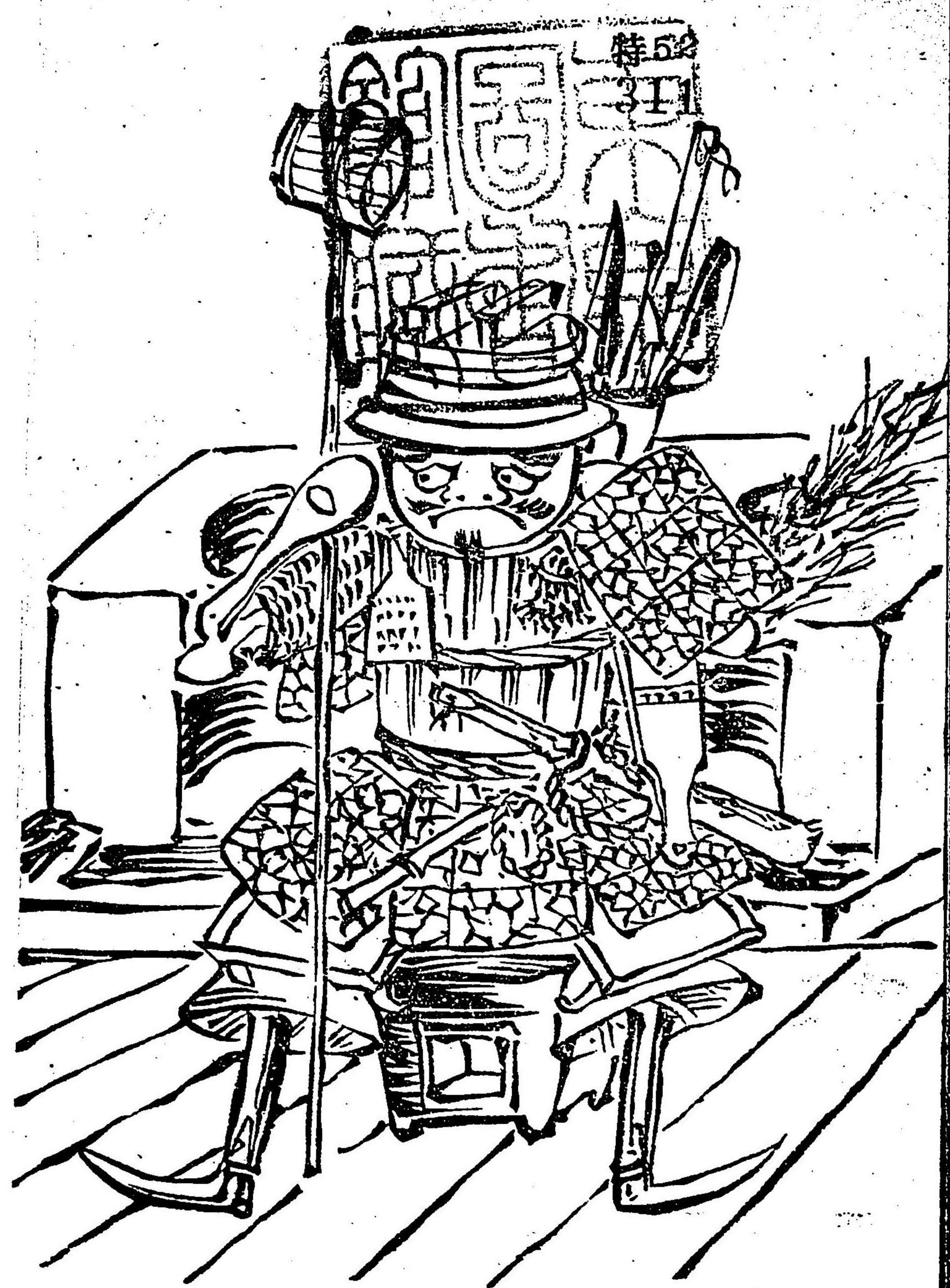


又

167  
4

世  
世  
平  
記





緒言

本書は元寫本にて何人の著作に係り又何の頃より傳經れ

たるを知らざれども専ら鄙語を以て一家の世帯器具を軍

書体と陳述記載し童蒙をして識らざ知らぬの内其名稱

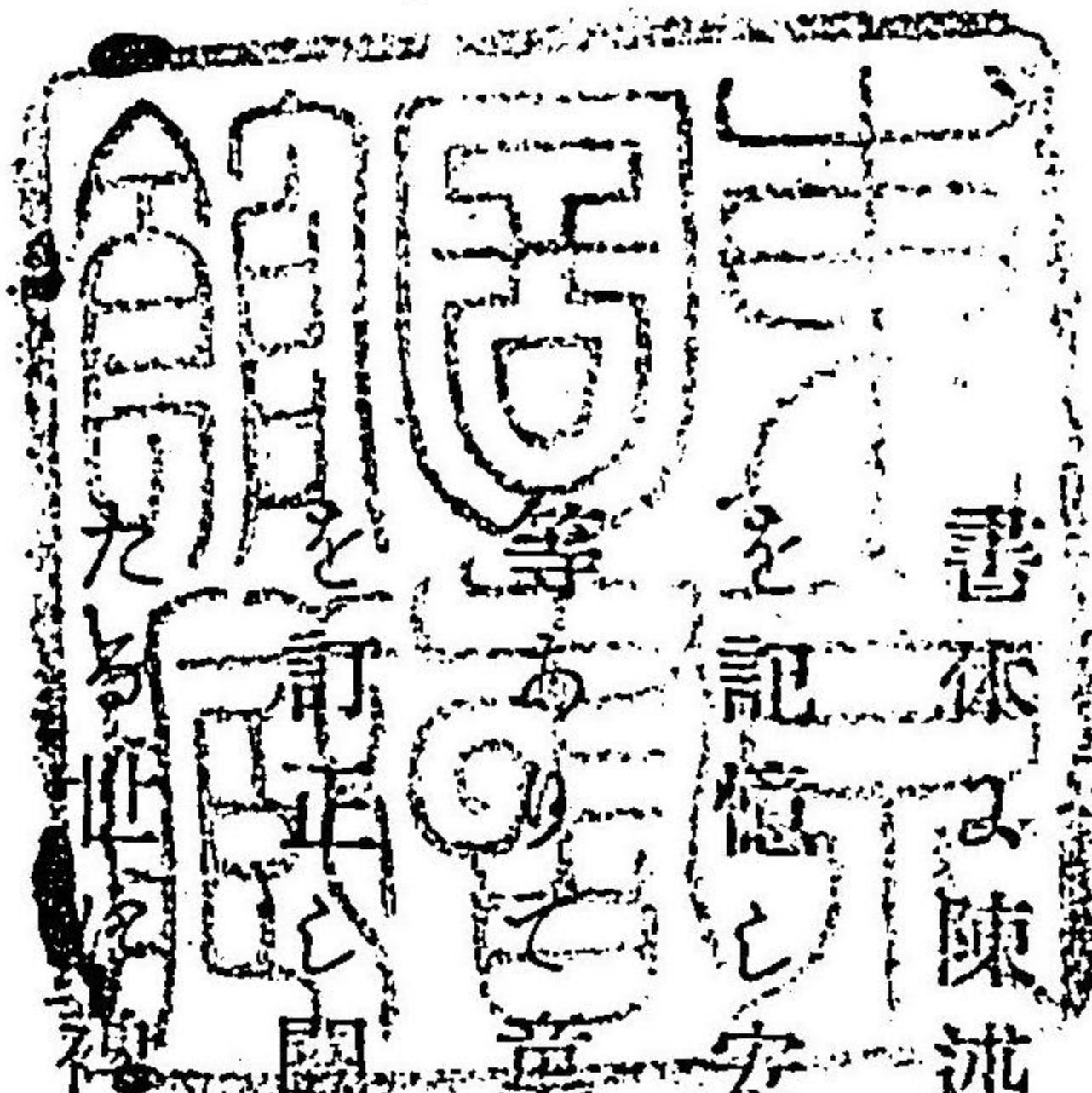
を記憶し安からしむべき一書なり然れども往々誤謬闕漏

等ありて童蒙の讀み難き恐れ多々之れあり故に予今誤謬

を訂正し闕漏を補ひ且つ假字を加へ上梓す然れども差し

らされども所謂蓼食ふ虫も好き不好きとかや若し購讀す

る童蒙として才補することあらは予の幸福之に過ぎず爰



に所思を述て緒言とあす云爾

明治二十五年五月念五日

吟津二平識

世帯平記

抑も世帯平記の根本は加良久多國の唐人の寢言を引て一帖の雪より白ろさ白紙と鹿の毛鎗の筆を染め疲馬の机に打持れて硯の智慧も淺草の片邊に世話風流を好む運盡兵衛と云ふ者或る夜臺所に夥敷き物音すると覺へ何やらんと夜着の袖より首を揚げ見るに竈の上より何か落ると見へし所ろ布巾の白旗を翻し竈山の城主釜の冠者焚安家臣鍋の貞任底炭を始めとして一味の者を召し集め板間の原へと押出す釜の冠者進み出坐敷道具の奴つ原我れ々れを勝手道具と見侮り萬物の長たる人間を養ふ器を知らぬ

依て坐敷方を打潰し然るへいと云いければ面々尤かりと  
組従ひ下知をさす時又行燈美濃の紙糊張心の中に思ふ様  
置は勝手に在りと雖も夜るは坐敷方へも交るとかれは聞  
捨よは成り難しと家臣油次信を呼ひ内々坐敷方へ通つけ  
れば坐敷方の大將戸棚中納言長持卿の長男重子篁笥の守  
溜塗進み出内通の趣き聞くより何に小権式加良久多共攻  
め來るを幸ひ壓にして鬱憤を晴さんと急き手勢を集めた  
り掛る所ろよ算盤主計の守玉鳴店先より馳せ來たり勢ひ  
込て云ひけるは二階と勝手と合体せば事六ヶ敷く候んと  
階子をさつと引き外づとければ二階の加良久多齒がみを

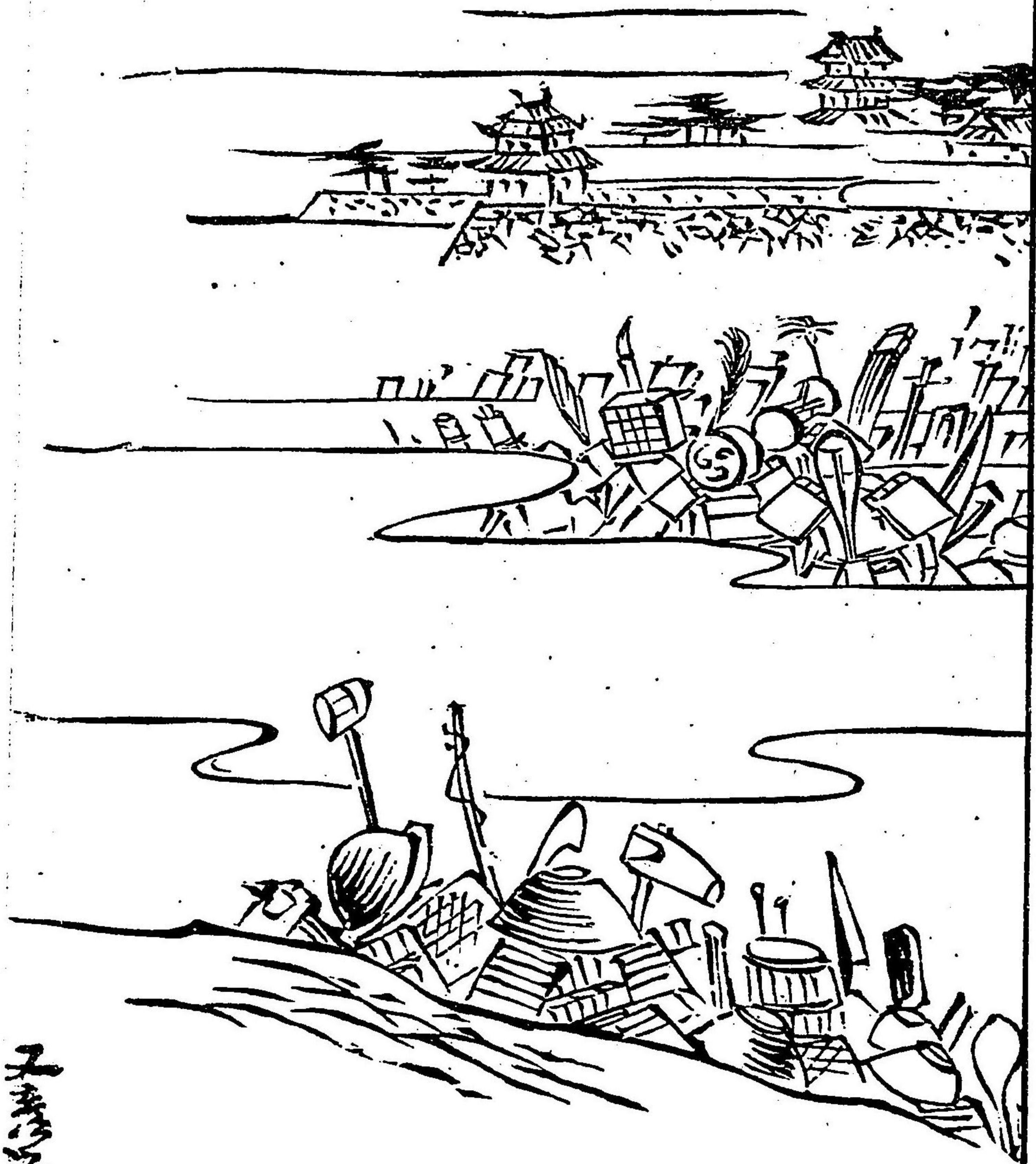
四

か上り口迄控よけり此時勝手方の先陣の大將竹田信玄  
辨當の後胤食籠三ツ重其頃名高き香之物鹽辛絹の陣羽織  
其出立も華麗に跡よ繼ぎて井熾禪山七林寺土瓶法師茶袋  
の母衣武者にて錦地鉢の陣羽織に南京焼の兜鉢を猪首よ  
着かち片口の駒又打乗り出て立ちければ組下には大皿八  
郎清水井兵衛茶碗五郎八各太刀を刺身皿我れも我れも先  
さんせんと勢込で押出す中陣の大將は長者の城主備前燒  
の介水鉢入道米磨桶皮の大鎧敵の真中桐柄杓差物よは六  
尺棒と云ふ檜棒を小脇に甲斐込み出立たり組下よは四斗  
樽左衛門輪が切れ底拔左衛門尉無益手桶太郎小桶藏人小

五

六  
監半藏何れも向井の弓の釣瓶を引絞り荷内を固めて持掛  
けたり後陣の大將は文吹茶釜の判官年經柄杓の抜物又は  
貳拾目掛の筒茶碗を小脇にかひ込み煮へ立たり組下には  
火箸坊戒尊鉄弓入道針金火吹竹八郎十能助成火打次郎石  
角刃釜の鎌鎗を提げ石火矢に下知をかす遊軍として俵兵  
太米成は改良米の大文字付の兜に唐白織の陣羽織を着  
昔と作りの杵柄の太刀を帯ひ疊針の大身鎗を提げ米搗毛  
の荒馬に打乗りて味方は小糠と待つ間程おく小米山の城  
主釣掛舛之介相圖の椀八丸盆給仕箸一前を始めと或は  
火吹竹之進跡に繼ぎて付木便利之介其他の加良久多都合

其勢八萬騎次第を亂さす押出す勝手方の大將釜の冠者焚  
安鉄色の陣羽織に銅古蓋の前立物唐ら銅の太刀を横へ五  
徳の馬より打乗たり附従ふ面々は鍋の貞任底炭薄田の茶切  
庖刀定光赤鍋の綱朝倉蜀椒の守入道摺小木摺鉢の前の司  
成安切貝次郎片行笹羅三八を始め惣勢合せて七萬餘騎一  
丁身ては檜木と固め雑木より非らず雑兵迄敵を今やと松枝  
に焚け付け馳せ付け馳せ集りける折りとも椽の下より加  
勢として下駄三郎政貫駒下駄の手綱を引とめ長刀かりの  
革草履を小脇にかひ込み出立たり付き従ふ面々は木履の  
大夫高濱雪駄兵衛音高芒鞋之介紐長等七千騎前詰め勢は



又

腰兵糧又冷飯雜炊蛇の目の傘六郎夕立の鞆拔き放し馬の  
 背を降り分けんと一度よこつと降出せは坐敷方は小立矢  
 倉に馳せ登り巾着根付の遠目鏡を取出し寄來る敵を見る  
 より灰吹太郎はたまりかね吸空の野煙を揚げ鉄鉋組よりは  
 烟管藏人吸付の守長棹元首の玉を込め吸ひ口薬の用意し  
 て味方の相圖を待かけたり坐敷方先陣の大將は高島硯之  
 助石政其日の出立は文鎮の兎又筆立の指物又孔雀の羽子  
 の陣羽織千枚通しの大身鎗筆の命も續竹流石の切味見せ  
 んぞと馬は名に合ふ摺墨の手綱搔さくり文廻し壓尺と名  
 つくる鉄棒を小脇にかい込み出立たり跡に繼ぎて大福帳

左衛門金庫の鍵を腰に下け机の馬に打乗り敵を久留利と  
巻紙にて胴切或は半切の高名手柄を爲さんと其儘急ぎ乗  
出す組下には小遣帳藏萬覺帳五郎掛野與市千木の皿平中  
陣書物勢の惣督武鑑太夫厚綴徒然草の大鑑に八十目掛の  
垂狐傳を横たへ春秋の鞍を置きたる三才圖繪の馬に乗り  
四書五經今川仲秋百人一首を左右に従へ只一散に乗出す  
後陣の大將は古表具の守切成生花の前立物獅子口の駒  
乗り遠州流の鎗を横たへ突出たり弓手には碁盤忠信四ツ  
目殺しの太刀を差し敵を切て高名せんと踴躍して出立た  
り馬手又は將碁の判官香車の鎗を横たへ桂馬の手綱搔く



り飛車先の寄るを突留んと角行く道を開きて乗り出たす  
遊軍として備前入道徳利ユツプの差物をさと盃毛の駒に  
金巻繪の鞍を置きて吞み出したる其勢ひは唐士の關羽に  
あらず冷酒の挑子もよと知られたり二番備は三味線の  
守糸道珍點の大鎧に猫皮の腹巻して象牙のはちの當るを  
幸ひ人に觸れば人を斬る馬に觸れば馬を斬ると胡弓と云  
ふ名代の弓を横たへ打出たり跡に繼て都の六郎琴爪琵琶  
の彌四郎太鼓頭五郎呼子の笛を懐中し時を取ての攻鼓は  
んはんと打鳴せは馳せ來る總大將重子筆笥の守溜塗は其  
頃名高き武勇の達人天下一鏡の前立物母衣綾掛し陣羽織

馬は名に合ふ絹縮み手綱は染色のすてきを引かじめ乗り  
出す附従ふ方々は越後の國の住人縮三郎松坂縞の守木綿  
切れ筑前の守博多の産主帶美ふんと越中の守締安股引  
白兵衛或は内所茶利九郎其外一騎當千の若者共我れも我  
れもと推し出す斯て兩陣勢を揃へ坐敷ヶ原と板間ヶ原と  
の境ある坐敷敷居の溝川へ押出す頃ろはでれつく天王の  
御宇寶祿元年へのわいたちの十三月猫の大社日兩陣一度  
にどつとよ時の聲を揚げ勝手方大將釜の冠者焚安の陣よ  
り食籠辨當之介兩手より梅千の種が島鉄鉦玉よは丹波栗  
をはらくと打出す坐敷方先陣の大將將基判官飛車手角

繩十文字を切り破らんと駒を竝べて打つて出れば是を見  
 るより釣掛舛之介白米一舛懸命を勝利を得んと無二無三  
 に突出れば坐敷方の後陣破れて將基倒らばらばらばら  
 とふりければ手燭左衛門友行提灯の皮具足も身を固め鯨  
 の弓に銅鎖の釣を張り矢の根は會津の百目掛釜の冠者を  
 目掛けに打放せば矢先は運の盡斗舛之助が脚板に蠟燭の  
 流矢來りてわつと忽ち目も眩み板間ヶ原まで打死す爰に  
 於て勝手方より朝倉蜀椒之介入道摺小木と名乗り押出た  
 す坐敷方よりはふんごと越中の守締安其身三尺に足らぬ  
 して摺小木も味噌を附んと打て掛るを摺小木もふんごと

越中を突き破んと打て掛るを越中も豪傑故に摺小木を包  
 取んとす左れども摺小木手練の早業は人の前にちよくと  
 飛退さ飛び掛りければ越中怒ると火の如し摺小木深手を  
 取ては一大事と摺鉢の陣鐘を打鳴らし切貝かりの大薙刀を  
 八層三段水車と切立れば越中の守危く見へければ一味の  
 者より加勢として羽織の守羽二重仙臺平の袴を高く引き  
 揚げ常州絹の禪禪を掛け物差棹を小脇にかひ込み四方八  
 方に切り廻せは當り又近くものもかち手拭一筋足袋一足  
 等一度にきつと蜂の巢を打破りたる如くに騒ぎ立れば天  
 地も動く斗りかり因て摺小木も多勢に無勢の敵と難さを

察と庵丁は援兵を乞ひければ庵丁は頼まるゝ程なればと  
 て斧平鎌一小刀鋸引等三千騎を卒ひ越中の守の本陣を打  
 ければ互に勝負を決せんとのきを削る修羅の巷を踏ふ  
 分けて雪太兵衛音高とやらとやらと馳せ來り敵の  
 真中に飛び入りて双方共和睦せんとせとも戦ひ酣に  
 して止み難く見へける折柄店の阿方の神棚の戸扉靜に開  
 かせて神の御聲の高々とかゝる目出度君が代又加良久多  
 道具の徒士軍さ相呂々々和睦々々と勅へは數多の諸道具  
 がらがらと飛び退さり伏して其儘和睦に及びけり其  
 神は大國神と思ひ居りしに誰やら表口の戸を頭んくと

たゞさければ夢は覺め寝忘れたりと遠て孫兵衛は起見れ  
 ば東は早白みけり

三-4

明治二十五年五月十六日印刷  
全 年五月三十日再版

著者 大分縣平民 津 二 平

大分縣豐後國北海部郡政所村

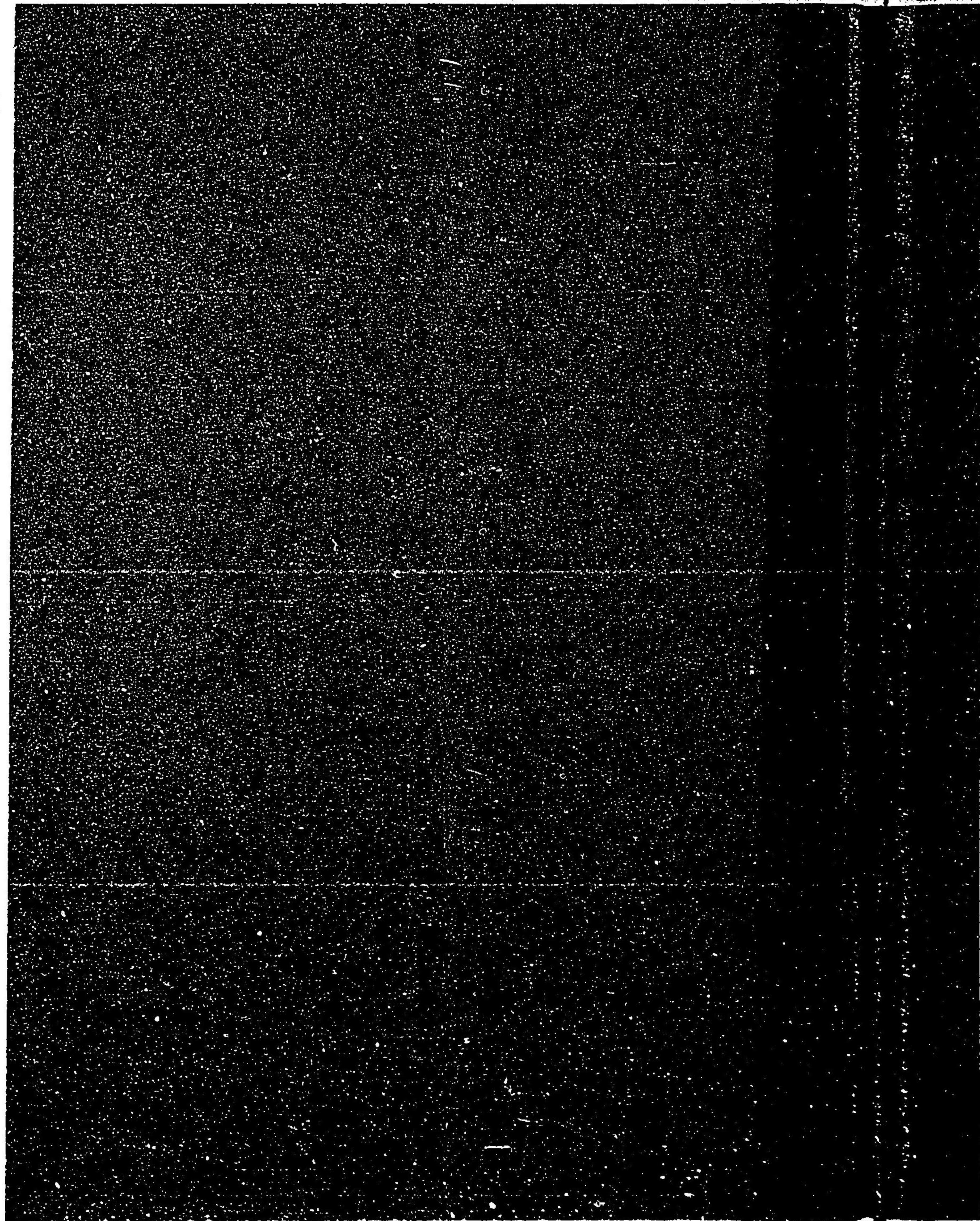
發行者 大分縣下大分町 竹 田 ● 津 多 隊

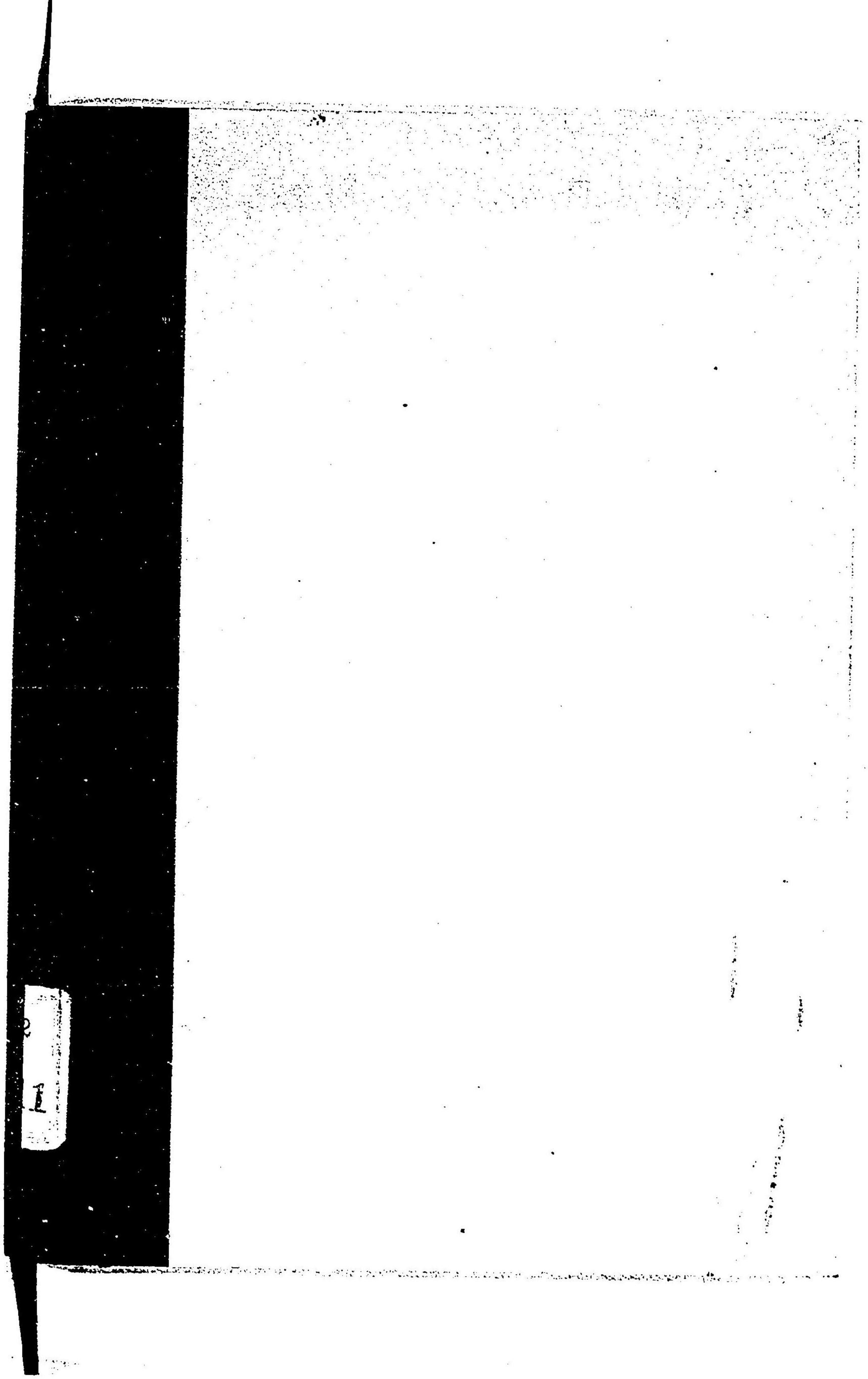
大坂市東區高麗橋五丁目四十五番屋敷

印刷者 大 垣 彌 太 郎

大分縣大分町書肆

專賣所 甲 斐 治 平





世帯平記

(翻刻)

国立国会図書館

205223-000-6

特52-311

世帯平記

畔津 二平/著

M25

EDV-0273



特

3

